

新刊紹介 : パトリック・ベイユヴェール編『日本の旅』

著者	相良 匡俊
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	2
ページ	151-163
発行年	2005-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022570

新刊紹介：パトリック・ベイユヴェール編 『日本の旅』

相 良 匡 俊

ロベール・ラフォン（Robert Laffont）社の「ブキャン(Bouquins)」という叢書は、上質とはいえない紙を糊で束ね、柔らかい表紙をつけた、いわゆるペーパーボックスであるが、収容されている書籍すべてが1000ページを超える大部のものであることが特徴になっている。タイトル数にしてほぼ300、冊数にすれば500を超える大きなコレクションであるが、日本にはないタイプの叢書で、イメージを掴むのが容易でない。私が最初に入手したのは、ギユミノーの読み物風歴史書、『第三共和制の本当の物語』、『第四共和制の本当の物語』を合本にした2冊であった。当初、別の出版社から合計10冊で刊行された二種の本を2冊、各巻1200ページにまとめ、しかも価格は2冊で5000円、なにやら荒業という趣を感じさせるものであった。

2004年春のカatalogを見ると、全刊行物は、「事典」、「歴史と随筆」、「文芸と詩」、「大衆文学」、「音楽」、「旅行」の6種に分類されている。「文芸と詩」を見てみると、シェークスピアの8冊、アレクサンドル・デュマ父の12冊、ヴィクトル・ユゴの15冊が含まれている。「歴史と随筆」の中にはトゥキュディデス、プルタルコスから、ギゾ、ギボン、ランケはもちろん、ドロイゼンがあるかと思えば、最近のアムルー『占領下フランス人の歴史』全4巻が入っているという具合である。なお、「大衆文学」の中には、コナン・ドイルや『オペラ座の怪人』のガストン・ルルーという古典からボワロー・ナルスジャックに至るまで、新旧取り混ぜて収まっている。

他社で刊行されたものを分厚い廉価版にするコレクションなどと思っはいけない。それほど安直な代物ではない。「歴史と事典」というシリーズがある。題名からして納まりが良くない印象もあるが、この中で出されている1600ペー

ジあまりのアルフレッド・フィエロ編『パリ：歴史と事典』は立派な書き下ろしで、パリ市概略、パリに関する多様な項目の解説、さらには膨大な文献目録を抱え込んでいて、見事な学術文献になっている。この中の事典の部分は鹿島茂氏の監訳で白水社が刊行している。800ページ、価格9500円という堂々たるものであるが、和訳されたのは、原著の3分の1に過ぎないのだ。

さて、ここで私が紹介する書籍はアンソロジーであるから、必ずしも書き下ろしとはいえない。とはいえ、その構成、内容を考えれば単なる再版ものや、複製ものとするわけにはいかない。むしろ、一人のフランス人日本学研究者の該博な知識の結晶として、従って書き下ろしの学術書として受け取るべきものである。そして、この本の背後には、膨大なフランスにおける日本学研究所の蓄積が控えている。正式な書名を和訳すれば次の通りである。『日本の旅—フランス語テキスト：1858~1908』。Patrick Beillevoire, *Le voyage au Japon: Anthologie de textes français 1858-1908*, Paris, Robert Laffont, 2001 (coll. 《Bouquins》)。刊行年は2001年であるから、新刊紹介を名乗るのはいささか気が引けるが、これまで本書について記された日本語文を見ていないし、また、19世紀の日本を描く、これほどの書物の存在が日本で知られないままであることは許されない。敢えて小文を呈したいと思う。

まず、1100ページからなる本書の全般的構成を見ておこう。全体は、30数ページの序文、本書の核心をなす960ページあまりのアンソロジー、100ページほどの文献目録と語彙集などからなる付録の三つの部分に分けることができる。アンソロジーは5部からなっている。第1部は「幕末の日本」、第2部は「明治維新直後の横浜、東京およびその周辺」、第3部は「国内の旅：冒険家と旅行者」、第4部は「風俗、文化、芸術」、第5部は「新しい日本—国際的認知に向けて」となっている。各部はさらにテーマと時期に応じて、10個前後ないし20個前後の節に分けられており、各節にはいくつかのテキストが配置されている。

全体として、編者によって紹介され、編集されているのは58人の著者による62種の文献であるが、62のテキストの全体、ないし一部が魚河岸のマグロよろしくゴロゴロと並べられているわけではない。それぞれの文献は裁断され、小片とされ、小さいものでは数ページ、大きいものでは30ページ近い断片が先に

記したシェーマに応じて組み合わせられて、幕末から明治末期までの日本が、あたかも大きなモザイク画のように描かれるのである。例えば、もっとも頻繁に利用されるブスケの著作は20数箇所が登場する。再三にわたって出現するテキストというのは、おそらく使い勝手がよく、とりもなおさず目配りがよく、資料的価値の高いものなのであろう。62種の文献については末尾に一覧表を示しておく。

もっとも、こうした資料の扱い方については批判もあろう。原資料は細かく裁断されているので、元々の味わいを失ってしまっているのではないか。通して読んで感じられる面白さが失われているのではないか。とはいえ、野心的な編集方法ではある。何よりも多数の同時代の日本関係テキストの中から62種を選び出し、さらにこれを大きなシェーマに合わせて分解し、もっとも適切な部分を摘出し、配列する作業が必要なのである。日本関係の文献について熟知していなければなしえない作業といってよいであろう。ここで編者について記しておこう。

編者パトリック・ベイユヴェール氏について、本書の記すところはさほど多くはない。C N R S（国立科学研究センター）の研究主任であること、高等社会科学研究院（Ecole des hautes études en Sciences sociales）日本学研究センターの所長であること、沖縄の歴史と文化、日本社会、日欧関係の専門家であるとされているだけである。幸いなことに、この高等社会科学研究院日本学研究センターのサイトに、より詳細なデータを見ることができる。上記センターは、風土論を展開して日本でもよく知られているオギュスタン・ベルク氏のおられる研究機関であり、ここには数名の研究者と数名の博士論文執筆中の若手研究者が所属している。ベイユヴェール氏は（おそらくベルク氏の後を受けて）ここの所長を務めておられる。

氏の本来の研究領域は、沖縄の歴史と文化、日本風にいえば民俗学で、大きく分ければ、琉球王国当時の琉球社会のあり方に関する研究、例えば統治と宗教の関係、他方、日本の統治下に置かれた沖縄の社会と沖縄の人々を関心の対象としておられるように思われる。既にヨーゼフ・クライナー氏の編集にかかる沖縄関係論文集『世界史のなかの琉球』（ミュンヘン、2001）に「フランス

の対琉球政策」を發表しておられる。一方、雑誌『シパンゴ』第9冊（2000年）に掲載された「日露戦争期のフランス世論と日本」など、日仏関係史に関わる研究も手がけておられ、こうした関心は、『日本関係フランス語文献—日本関係文献ビブリオグラフィー：1850～1945』（*Le Japon en langue française. Bibliographie des ouvrages et articles sur le Japon publiés de 1850 à 1945*, Paris, Editions Kimé, 1993）として結実している。要するに、このアンソロジーの編者たるにふさわしい、豊富な知見をもっておられるのである。序文、年表、さらには末尾に付された事項・人（神仏）名・地名用語集を見れば、編者の知見の広さと深さは明白であり、優れた編者によって過去の日本が復元されていることを幸福に感じるのである。

本書の素材となる62種の文献の中には、既に日本でよく知られているものもある。日本に関してフランス人が書いた著作を知りたいければ、もっとも容易に入手しうる文献は佐伯彰一・芳賀徹『外国人による日本論の名著』（中公新書、1987年）があるが、ここにはギメとレガメの二本、ピエール・ロチ、それに『日本の旅』の収録対象となっていないポール・クローデルの著作しか挙げられていない。より詳細なものとして富田仁編『事典・外国人の見た日本』（日外アソシエーツ、1992年）がある。ここにはモンブラン、C.他、森本秀夫訳『モンブランの日本見聞記—フランス人の幕末明治観』（新人物往来社、1987年）があげられており、中に、『日本の旅』が扱うボヌタン（Bonnetains）、カヴァリオン（Cavaglion）の著作が紹介されている。

さらにこの『事典』が紹介するのは、ギメ、レガメそれぞれの著作、ロティの作品の他、ルサン（Roussin, Alfred）、樋口裕一訳『フランス士官の下関海戦記』（新人物往来社、1987年）、ブスケ（Bousquet, Georges Hilaire）、野田良之・久野桂一郎訳『日本見聞記』（みすず書房、1977年）、デュバール（Dubard, Maurice）、村岡正明訳『おはなさんの恋—横浜弁天通り・1875年』（有隣堂、1991年）、ド・ボヴォワール（de Beauvoir, Ludovic, comte）、綾部友治郎訳『ジャポン1867年』（有隣堂、1984年）、グダロー（Goudareau, Gustave）、井上裕子訳『仏蘭西人の駆けある記』（まほろば書房、1987年）である。全体として10冊程度である。多いというべきか、少ないというべきか。

だが、これ以外が日本で知られていないわけではない。日仏交流史の専門家、西堀昭氏の『日仏文化交流史の研究』（白水社、1981年）と、その増補改定版『増訂版・日仏文化交流史の研究』（白水社、1988年）、澤護氏の『お雇いフランス人の研究』（敬愛大学経済文化研究所、1992年）、および同氏の『横浜居留地のフランス社会』（敬愛大学経済文化研究所、1999年）には、さらに多くの著作とその執筆者が紹介されており、また利用されている。これらでは、アペール（Appert, Georges）、コラシュ（Collache, Eugène）、コトー（Cotteau, Edmond）、デシャルム（Descharmes, Léon）、ダスプ（Dhasp, Jean）、ヒュープナー（Hubner, Josef Alexander von）、ルクー（Lequeux, andré）、ウトレー（Outrey, Maxime）、ヴィダル（Vidal, Jean）の名前と、場合によって著作の一部を見ることができる。

さて、62の文献を執筆した58人はどのような人だったのであろうか。ベイユヴェール氏はかなり詳細に執筆者についても調査して紹介している。目立つのは貴族の肩書きをもつ著者が多いことである。私の見た限り17人が貴族である。貴族が多いことはベイユヴェール氏が指摘しているが、なぜなのかは記していない。ここには二つの事情がからんでいると考えられる。一つには、貴族の家系では、男子は軍人と外交官になるものが多いという伝統が関係している。そして幕末維新期の日本は、フランス人外交官と軍人の大活躍の舞台であった。実際、58人の著者のうち、陸海軍の軍人は10人を数え、外交団と領事団に属するものも10人に上る。だが、軍人でも外交官でもない貴族も何人か見える。オディフレ(d'Audiffret, Emile)、ボーヴォワール、ダルマ、デュブール・ド・ボザの4人は旅行者である。だが、ただの旅行者ではない。いずれも世界一周の途次、日本に立ち寄っている。この中で、世俗的な意味で、おそらく、もっともランクが高かったのはボーヴォワールである。この人物は来日した当時は二〇歳を超えて間もない頃であった。上記の『事典』にも、また『日本の旅』にもパンティエーヴル公に随伴して来日した、と書いてあるが、パンティエーヴル公が何者であるかは記されていない。パンティエーヴル公爵の肩書きは、伝統的にオルレアン家系統の王子に与えられるものであった。この当時のパンティエーヴル公は、1830年から48年まで王位にあったルイ・フィリップの孫であ

った。ルイ・フィリップは1848年革命に際して退位し、亡命していたが、ボーヴォワールは王孫の世界周遊の旅に供として同伴していたのである。ついでながら、『事典』の記載には誤りがあるので訂正しておく。ボーヴォワールはフランスの外交官とされているがそうではない。帰国後、たしかに外務省に職を奉じるのであるが、オルレアン家に近いドカーズ公が1873年に外務大臣となったために副官房長に就任したのであった。そして1877年にドカーズ公が外務大臣の職を辞した後、ボーヴォワールはオルレアン家の王位継承権者パリ伯の個人的な秘書となる。

ダルマ (Dalmas) も世界周遊組である。安穩とした生活に飽きて、貴族仲間と世界旅行に出かけた道すがら、日本に立ち寄ったのである。デュ・ブル・ド・ボザ (Du Bourg de Bozas) の名前はマルグリット・マリ・シピエール。女性である。この人物はロベール・デュ・ブル・ド・ボザ伯の妻であった。夫はアフリカ探検で有名な人物であったとのことであるが、単身、世界周遊の旅に出て来日し、半年近くを日本で過ごしたのである。世界一周の旅が流行していたのであろう。ジュール・ヴェルヌの『80日間世界一周』が刊行されたのは1873年のことで、こうした流行が下敷きになっていたのである。そして、こうした伊達酔狂をすることが可能だったのは、この時代には地主的経営の農地をもつ貴族だったのであろう。フランス革命で貴族のもつ封建的諸特権は廃棄されたが、私的所有を確認する革命であったから、反革命の陰謀に加担でもしない限り、貴族のもつ農地は維持されたのである。また、フランスでは、いわゆる産業革命はすでに終わっており、経済の中心は農業ではなくなっていたが、遊びの文化の担い手はまだ農業に基礎をおく貴族だったのである。工業の世界に属する富豪はギメだけである。

58人のうち3人は学生である。オーベール (Aubert, Louis)、メイエ (Meyer, Edgar)、ヴレルス (Weulersse, Georges) の3人はパリ大学が設けた奨学金を利用して日本を訪れた。この奨学金は銀行家のアルベール・カン (Kahn, Albert) の寄付を利用して優秀な学生の見聞を広めるために設けられたものであった。年間何人ぐらいの学生が旅に出たか、どのような行き先が多かったか、などについては知られていない。だが、社会学者のフェリシアン・シャレもこの奨学金を利用して来日し、『日本の旅』には収録されていないが、

後に見聞録を刊行している。ここに登場するヴレルスも社会学者である。

ついでながら、62の文献がどのような出版機関から刊行されているかを見ておきたい。初期の段階で圧倒的の多いのはアッシュェット (Hachette) 社である。旅行ものを多く扱っていた出版社で、別のいい方をすれば、1860年前後の日本は、探検・冒険の対象であり、その意味ではアフリカと同様の存在であった。日本国内 (l'intérieur du pays) は、おそらくアフリカの奥地探検というのとおなじように、「日本の奥地」と訳すべきであるに違いない。だが、後になると、プロン (Plon) 社、ペラン (Perrin) が多くを出版している。プロンは、やや保守的な政治家の回想録などを多く出しており、ペランは学術書が多い。世紀の交には、日本は国際政治を考える上で、一つの着眼点となっていたのである。なお、現在では学術書の出版で大手となっているアルマン・コランが何点かを出版している。この当時、アルマン・コランは、社会改良運動の拠点であったミュゼ・ソシアル (社会博物館) のシリーズを手がけていた。またアナーキズム文献で有名だったストックも社会主義ジャーナリスト、テュロ (Turot, Henri) の日本見聞記を出している。日本に眼差しを向けること、日本について書くこと、そうした行為はそれ自体がフランス社会に向けた社会的メッセージの発信であった。『日本の旅』は過去の日本を復元する試みであるが、同時に19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランス社会を復元するのである。

いささか本末顛倒ではあるが、本書に記された日本の印象について紹介しておこう。全体として見れば、1860年代の日本は、外交官と軍人、そして旅行家と探検家が記している。日清戦争を経て日露戦争に勝利をおさめた日本は、実態はともあれ、列強に並ぶアジアの大国であった。プロのジャーナリスト、評論家、学者 (とそのタマゴ) の日本見聞記が並ぶことになる。こうした中で、何とんでも面白なのは初期の見聞記である。海のものとも山のものともわからない、未知の人々との遭遇が語られる。何年か後には、実際にフランス人暗殺事件も起きている。おずおずと極東の民に接するフランス人の心理状態、そしてフランス人の記す、我らの先祖の姿が興味深い。ここではいくつかの挿話を紹介するに留めたい。

まず、最初の日仏友好通商条約（1858年）を締結したフランス大使、グロ男爵の書記官を務めたアルフレッド・ド・モージュのテキストがある。グロ男爵はラプラス、プレジャン、レミの3艦を率いて同年9月、下田港に入り、幕府の対応を待っていた。フランス側使節一行は下田の奉行から昼食に招待される。この時、すでに日本側には通辞がいて、フランス側通訳のバリ外国宣教会の神父、メルメ・ド・カションと奉行の間に膝をついて通訳を務めていた。ド・モージュが記すのは食事の様子である。接待を担当する男性もまた、腰に二本の刀を差していた。つまり侍がボーイの係りをしていたのである。

一品づつ運ばれてくる度ごとに、フランス人は驚くのであった。いずれもが豪華さと洗練に充ちており、中国の官僚のもとでは経験することのないものであった。これに近い文は他にも現われる。日本の清潔さは中国では経験しないものであった、等々。料理は最初、盆栽の姿にあしらわれており、次の魚料理は大海を模した皿に盛り付けられており、さらにはエビとカブを利用して花のように飾られた皿が登場した。奉行は誇らしげに微笑みながら、花のように盛り付けられた料理は自分の部下の作品であると話した。フランス人が仰天したのは食事の最後で、なんとフランス人にとって馴染みのあるガトー・ド・サボワ（サボワ地方のケーキ）が登場したからであった。説明によって正体が判明した。これは、はるか昔、スペイン人が紹介し、カステラと名づけられた菓子であった。ここに描かれている下田の武士たちの姿は、きめ細かく神経を遣い、懸命に接待する現代日本のサラリーマンに近い。

だが、別の日本人も描かれている。フランス使節団はいくばくかの後、江戸入府を果す。宿舎として提供された寺院は居心地のいいものではない。だが、日本人との接触は不愉快ではない。寺院で出会った僧侶たちは知性豊かな人々であり、僅かな期間にフランス語を覚え、ボンジュール、ボンソワールと挨拶するのであった。僧侶たちは、またたく間にフランス語で一から百までいえるようになり、さらにフランス語を学びたがるので、宿舎を即席の学校にしたという。ド・モージュは、さらに一ヶ月長く江戸に逗留できれば、僧侶たちがフランス語だけで話せるようにできたらうと残念がるのであった。初めて出会った“異人”に屈託なく接し、旺盛な好奇心を剥き出しにして貪欲に新しい知識を身につける僧侶の姿は、私たち、現在の日本人とは異なる趣を呈している。

そういえば、ダルマも今日の日本人の姿とは異なる有様を描いている。すなわち日本人は怠惰で享乐的で、ひとをオチョクするというのである。他の所では、日本人は労働者としてはいい加減で、すぐにサボる、という記述もある。

あるいは100年前の日本人と、現在の日本人は異なるビヘイヴィアをもつのかもしれない。アジアの多くの国で見られる、機会があれば手抜きをする労働者の姿が百年前の日本には見られたのかもしれない。明治維新以後、政府は教育を通じて、勤勉で愛国心に燃えた日本人を創造したのかも知れない。考えてみれば、私たちはついつい、日本人の精神構造は不変のものと考えてしまいがちである。明治維新以降の日本人の行動様式、心的状況の変容を追跡した研究はあまり行われていない。

明治も半ばを過ぎると、描かれる日本、日本人の姿は私どもの知るそれらに近づいてくる。遠慮会釈もなく、美しい光景を台無しにしながら、美的センス皆無の看板を立てる商人、美しい伝統そっちのけで近代化に走る政治家たち。列島改造は1970年代に始まるわけではないのである。フランス人たちは、こうした無謀な行為がこの美しい国を破壊する、と嘆くのである。明治維新以降の百数十年、日本列島は恒常的に自然の脅威に見舞われ、それ以上に人間の脅威に荒らされ、日本の社会も大きな変貌を遂げた。だが、多くの外国人が証言するように、相変わらず日本の自然は美しく、日本社会は魅力を放っている。日本の美しさ、日本の魅力とはどのようなものなのであろうか。バイユヴェール氏の編集にかかる『日本の旅』は、そのような、もっとも基本的な疑問を私たちに投げかけるのである。

P. バイユヴェール編『日本の旅』掲載文献目録

(原題は内容が判明する程度の日本語に訳した。一部既存の和訳タイトルを借用した。刊行機関、刊行年は省略した。)

- APPERT, Georges 《L'île de Yeso. Un essai de colonisation japonaise》, *Revue de géographie*, XXV, juillet-décembre 1889. (G. アペール「蝦夷の島—植民化の試み」、『地理学雑誌』25号、1889年)。
- APPERT, Georges, 《Un coin du Japon. La province de Hida》, *Revue de géographie*, XXVII, juillet-décembre 1890. (G. アペール「飛騨の国」、『地理学雑誌』27号、1890年)。
- AUBERT, Louis, *Paix japonaise*, Paris, Armand Colin, 1906. (L. オベール『パクス・ヤポニカ』)。
- AUDIFFRET, Émile d", *Notes d'un globe-trotter. Course autour du monde, de Paris à Tokio, de Tokio à Paris*, Paris, Plon et Cie., 1880. (E. d' オディフレ『ある地球ウォーカーの手記：パリから東京、東京からパリ』)。
- BASTIDE, Louis, *Mémoires d'un vice-consul. Mon premier séjour au Japon (1880-1882)*, Dijon, Société bourguignonne de géographie et d'histoire, 1911. (L. バステイド『一副領事の回想。我が日本滞在記 (1880-1882)』)。
- BEAUVOIR, Ludovic Hébert de, *Pékin, Yeddo, San Francisco. Voyage autour du monde par le comte de Beauvoir*, Paris, Plon et Cie., 1872. (L. H. de ボヴォワール『北京・江戸・サンフランシスコ：ボヴォワール伯の世界周遊記』)。
- BELLESSERT, André, *Voyage au Japon. La société japonaise*, Paris, Librairie académique Perrin et Cie., 1902. (A. ベルソール『日本の旅：日本社会』)。
- BELLESSERT, André, *Les Journées et les nuits japonaises*, Paris, Librairie académique Didier Perrin et Cie., 1906. (A. ベルソール『日本の昼と夜』)。
- BERGASSE DU PETIT-THOUARS, Abel, *Le Vice-Amiral Bergasse Du Petit-Thouars d'après ses notes et sa correspondance, 1832-1890*, Paris, Librairie académique Didier Perrin et Cie., 1906. (A. ベルガス・デュ・プティ・トゥアール『副提督ベルガス・デュ・プティ・トゥアール』)。
- BONNETAIN, Paul, *L'Extrême-Orient*, Paris, Maison Quentin, 1887. (P. ボヌタン『極東』)。
- BOUSQUET, Georges, *Le Japon de nos jours et les échelles de l'Extrême-Orient*, Paris, Hachette, 1877, 2vols. (G. ブスケ『日本見聞記—フランス人の見た明治初年の日本』)。
- BRULEY DES VARENNES, Georges Prudent, *Le Japon d'aujourd'hui. Journal intime d'un missionnaire apostolique au Japon septentrional*, Tours, Alfred Mame, 1892. (G. P. ブリュレ・デ・ヴァレンヌ『今日の日本：一宣教師の北日本日記』)。
- BYRAM, Léo, *Petit Jap deviendra grand ! L'expansion japonaise en Extrême-Orient*, Paris, Berger-Levrault, 1908. (L. ビラム『小さなジャップが大きくなる』)。
- CAVAGLION, E., *254 jours autour du monde, ouvrage contenant 29 gravures sur bois, nouvelle édition*, Paris, Librairie Hachette et Cie., 1894. (E. カヴァリオン『254日世界一周』)。
- CHASSIRON, Charles de, *Notes sur le Japon, la Chine et l'Inde (1858-1859-1860)*, Paris, Dentu, 1861. (Ch. de シャシロン『日本・中国・インドに関する手記1858-1859-1860』)。
- CLAPARÈDE, Arthur de, *Au Japon. Notes et souvenirs*, Genève, H. Georg/ Lausanne, F. Payot, 1889. (A. de クラパレード『日本で：メモと回想』)。
- COLLACHE, Eugène, 《Une aventure au Japon, 1868-1869》, *Le Tour de monde*, XXVII,

- 2^e sem., 1874. (E コラシユ『日本の冒険：1868-1869』)。
- CONTENSON, Guy de, *Chine et Extrême-Orient*, Paris, Plon, Nourrit et Cie., 1884. (G. de コンタンソン『中国と極東』)。
- COTTEAU, Edmond, *Un touriste dans l'Extrême-Orient. Japon, Chine, Indo-Chine et Tonkin (4 août 1881-24 janvier 1882), par Edmond Cotteau, contenant 38 gravures et 3 cartes*, Paris, Hachette, 1884. (E. コトー『極東旅行記：日本・中国・インドシナ・トンキン』)。
- DALMAS, Raymond de, *Les Japonais, leurs pays et leurs moeurs. Voyage autour du monde*, Paris, Plon, Nourrit et Cie., 1885. (R. de ダルマ『日本人—その国・その習俗』)。
- DESCHARMES, Léon, 《Extraits de lettres inédites》, in : *Le Japon et la France. Images d'une découverte*, Paris, Publications orientales de France, 1974. (L. デシャルム「未刊行書簡集」、『日本とフランス』所載)。
- DHASP, Jean (=KLOBUKOWSKI, Antony Wladislas), *Le Japon contemporain (notes et impressions)*, Paris, Librairies-imprimeries réunies (ancienne Maison Quentin), 1893. (J. ダスプ『今日の日本：ノートと印象』)。
- DUBARD, Maurice, *Le Japon pittoresque, par Maurice Dubard, sous-commissaire de la Marine*, Paris, Plon et Cie., 1879. (M. デュバール『美しい日本』)。
- DU BOURG DE BOZAS, Marguerite-Marie Sipièrre, *Mon tour du Monde. Les Indes. La Chine. Le Japon, avec 165 gravures d'après les photographies et documents rapportés par l'auteur et une carte*, Paris, Librairie Plon-Nourrit et Cie., 1903. (M.-M. S. デュ・ブール・ド・ボザ『我が地球一週：インド・中国・日本』)。
- DUMOLARD, Henry, *Le Japon politique, économique et social*, Paris, Armand Colin, 1903. (H. デュモラル『日本の政治・経済・社会』)。
- DURET, Théodore, *Voyage en Asie, par Théodore Duret. Le Japon, la Chine, La Mongolie, Java, Ceylan, l'Inde (1871-1872)*, Paris, Michel Lévy, 1874. (Th. デュレ『アジアの旅：日本・中国・モンゴル・ジャワ・セイロン・インド』)。
- EGGERMONT, Isidore, *Autour du globe. Japon par I. Eggermont, conseiller de légation, ouvrage illustré de nombreuses gravures, de plans, de cartes*, Paris, Ch. Delagrave, 1900. (I. エジェルモン『地球を巡って：日本』)。
- GABRIAC, Alexis de, *Course humoristique autour du monde. Inde, Chine, Japon*, Paris, Michel Lévy frères, 1872. (A. de ガブリアック『地球を回る愉快な旅：インド・中国・日本』)。
- GOUDAREAU, Gustave, *Excursions au Japon, illustré de 42 dessins de Notor*, Paris, Librairie d'éducation nationale, 1889. (G. グダロ『日本国内の旅行』)。
- GUIMET, Émile, *Promenades japonaises, Tokio-Nikko, texte par Émile Guimet, dessins par Félix Régamey*, Paris, G. Charpentier, 1880. (E. ギメ『日本散策—東京・日光』)。
- HOUETTE, Alfred, 《Une ascension au Fujiyama》, in : *Le Tour du monde*, 2^e sem. 1879. (A. ウエット『富士登山』、『世界一周』、1879年秋・冬号掲載)。
- HÜBNER, Josef Alexander von, *Promenade autour du monde, 1871*. Paris, Hachette, 1873. (J. A. ヒューブナー『世界散策・1871年』)。
- KRAFT, Hugues, *Souvenirs de notre tour du monde*, Paris, Hachette et Cie., 1885. (H. クラフト『世界周遊の回想』)。
- LAPEYRÈRE, P. de, *Le Japon militaire*, Paris, E. Plon, Nourrit et Cie., 1883. (P. de ラペイレール『軍事の日本』)。
- LAPEYRÈRE, P. de, *Souvenirs et Épisodes. Chine, Japon, États-Unis, par P. De Lapeyrère, ancien attaché d'ambassade*, Paris, E. Plon, Nourrit et Cie., 1885. (P. de ラペイレール『回想と挿話：中国・日本・アメリカ』)。

- LAYRE, Charles Jules, 《Le Japon en 1867 : I. La vie japonaise, les villes et les habitants》, *Revue des Deux Mondes*, LXXIII, 1^{er} fevrier 1868. (Ch. J. レール 「1867年の日本：日本人の生活。都市と住民」、『両世界評論』1868年2月号)。
- LECOMTE, (Dionys), Ferdinand, *Voyage pratique au Japon*, Paris, Challamel, 1893. (F. ルコント『日本。実際の旅』)。
- LEQUEUX, André, 《Une semaine à l'intérieur du Japon il y a quarante ans》, in :*Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, No. 72, 1930. (A. ルクー「40年前の日本内地の旅」、『パリ日仏協会会報』1930年、72号)。
- LEROY-BEAULIEU, Pierre, *La rénovation de l'Asie*, Paris, Armand Colin, 1900. (P. ルロワ・ボリュエ『アジアの革新』)。
- LIÈVRE, Daniel, 《Une éruption volcanique au Japon. Promenades japonaises et coréennes》 in :*Bulletin de la Société de géographie du Havre*, 1896-1898. (D. リエーヴル「日本における火山の噴火：日本と朝鮮散策」、『ル・アーヴル地理学協会会報』、1896-1898年号)。
- LINDAU, Rodolphe, 《Description de Yédo. Lettre d'un voyageur》, *Revue orientale et américaine*, V/VI, 1861. (R. リンダウ「江戸に関する記録：一旅行者の書簡」、『アジア・アメリカ評論』1861年、5号・6号)。
- LINDAU, Rodolphe, *Un voyage autour du Japon*, Paris, Hachette, 1864. (R. リンダウ『日本をめぐる旅』)。
- LOONEN, Charles, *Le Japon moderne*, Paris, E. Plon, Nourrit et Cie., 1894. (Ch. ロナン『現代の日本』)。
- LOTI, Pierre, *Japoneries d'automne*, Paris, Calmann-Lévy, 1889. (P. ロティ『日本の秋の風物』)。
- MARTIN, Félix, *Le Japon vrai*, Paris, Bibliothèque Charpentier, Eugène Fasquelle, 1898. (F. マルタン『本当の日本』)。
- MATIGNON, Jean-Jacques, *L'Orient lointain. Chine, Corée, Mongolie, Japon. Impressions et souvenirs de séjours et de tourisme*, Lyon/ Paris, Storck et Cie., 1903. (J.-J. マティニヨン『遙かなる東洋：中国・朝鮮・モンゴル・日本。印象と回想』)。
- MEYER, Edgar, 《Le Japon》, in :*Autour du monde, par les boursiers du voyage de l'Université de Paris (Fondation Albert Kahn)*, Paris, Félix Alcan, 1904. (E. メイエ『日本』、『世界を巡って：パリ大学旅行奨学生の記録』掲載)。
- MIGEON, Gaston, *Au Japon. Promenades aux Sanctuaires d'Art*, Paris, Hachette, 1908. (G. ミジヨン『日本にて』)。
- MOGES, Alfred de, *Souvenirs d'une ambassade en Chine et au Japon en 1857 et 1858, par le Marquis de Moges*, Paris, L. Hachette, 1860. (A. de モージュ『中国・日本大使の回想』)。
- MONNIER, Marcel, *Le Tour d'Asie. L'Empire du Milieu*, Paris, Plon, 1899. (M. モニエ『アジア周遊：中華帝国』)。
- NAUDEAU, Ludovic, *Le Japon moderne. Son évolution*, Paris, Ernest Flammarion, 1909. (L. ノドー『現代の日本：その発展』)。
- OUTREY, Maxime, *Documents diplomatiques*, No. XI, Paris, Imprimerie Impériale, janvier 1869. (M. ウトレ『外交資料』、1869年1月、11号)。
- PETIT, Charles, *Pays de mousmés, pays de guerre*, Paris, Félix Juven, 1905. (Ch. プティ『ムスメの国・いくさの国』)。
- PIMODAN, Claude-Emmanuel-Henri, *Promenades en Extrême-Orient (1895-1898). De Marseille à Yokohama, Japon, Formose, Îles Pescadores, Tonkin, Yézo, Sibérie, Corée, Chine*, Paris, Honoré Champion, 1900. (C.-E.-H. ピモダン『極東散策：マルセ

- イユから横浜へ。日本・台湾・澎湖諸島・トンキン・蝦夷・シベリア・朝鮮・中国』)。
- RÉGAMEY, Félix, *Le Japon pratique*, Paris, J. Hetzel, 1898. (F. レガメ『実際の日本』)。
- ROCHES, Léon, *Documents diplomatiques*, No. XI, Imprimerie Impériale, janvier 1869. (L. ロッシユ『外交資料』1869年1月、11号)。
- ROUSSIN, Alfred, *Une campagne sur les côtes du Japon*, Paris, Hachette, 1866. (A. ルサン『日本海岸海戦記』)。
- TINSEAU, Léon de, *Du Havre à Marseille, par l'Amérique et le Japon*, Paris, Calmann-Lévy, 1891. (L. de タンソー『ル・アーヴルからアメリカ・日本経由マルセイユまで』)。
- TUROT, Henri, *D'une gare à l'autre. Indo-chine, Philippines, Chine, Japon*, Paris, P.-V. Stock, 1901. (H. テュロ『駅から駅へ：インドシナ・フィリピン・中国・日本』)。
- VIDAL, Jean, *De Niigata à Yédo (Japon), par M. le docteur J. Vidal, membre correspondant*, Toulouse, Imprimerie de Louis et Jean-Mathieu Douladoure, 1875. (J. ヴィダル『新潟から江戸へ』)。
- WEULERSSE, Georges, *Le Japon d'aujourd'hui. Études sociales*, Paris, Armand Colin, 1903. (G. ヴレルス『今日の日本・社会研究』)。